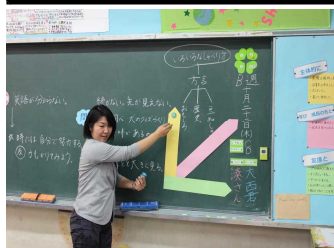


和中実践【4年 学級創造活動】

～ 一人一人が輝こう ～



本実践の主張点

学級創造活動において個人追究を持続させるために、

- ①個人の悩みに寄り添う場づくりを行う。
- ②個人追究を振り返る視点を子どもとつくる。

個人の悩みに寄り添う場づくりについて

本時において印象深かったのは、友達の悩みに寄り添う子どもたちの真剣さである。自分の探究の手を止め、時にはユーモラスに、しかし真剣にアドバイスを送る集団の姿は見えて非常に温かく、学級集団としての頼もしさを感じられた。和中学級の学級創造では、活動の初めと終わりにお知らせタイムが設けられており、子どもたちがその時の状況に合わせて、ちょっとした悩みをもちかけたり、自分の取り組みの紹介をしたりする場が設定されている。これは、「関わる力」につながる見方・考え方の片鱗を見出そうとする和中先生のしかけの1つである。普段から子ども一人一人の探究の過程を見取っておき、ここぞというタイミングで取り上げて共有していく。教師が常にアンテナを張り、子どもの学びの姿に真剣に向き合っているからこそできる支援の1つだといえる。本時においても、全体交流の場面で2人の悩みが取り上げられ、子どもたちは自分なりのアドバイスを送っていた。ここで考えたいのは、このような個に焦点化する場面が、周囲の子どもたちの探究意欲を持続させることにつながっていたかどうかである。あくまで授業を見た限りの感想ではあるが、その可能性は十分にあったと感じられた。全体交流で発言したのは10人強であり、その他の20数人の子どもは、話し合いに居合わせたという状況である。しかし、その場で出された発言を即時的に教師が拾い、突っ込み、価値付けていた。「それってどういう意味?」「〇〇するのはどう?」「何で〇〇ってつないだの?」といった、子どもの普段を知っていなければできない切り返しがあつたからこそ話し合いは活性化し、前に進んでいたように見受けられた。こういった場づくりは、単に時間と場所を保障する、ということではなく、互いをよく知り、高め合おうとする風土をつくることを含めての場づくりとなる必要があるということであろう。

しかしながら、今回のような方法を採用することに課題もある。それは、探究活動と全体交流の時間的なバランスについてである。本時において、全体交流が始まったのは25分間の学級創造のうち、開始8分の時点である。研究授業ということもあつたのかもしれないが、印象としては個人で探究を進める時間はほんのさわりで、本時はほとんどが話し合い中心であつたように感じる。授業者自身が提案資料の中でも書いているように、自分、または友達にとって切実な場面で湧き起こってきた悩みならば、もっと相手のことを自分事として捉え、自分や相手の立場を考慮した言動が飛び交うことが予想される。ここでいう切実さは、一人一人の探究の過程で起こる悩みや葛藤とつながるところであると考え、もう少し全体交流の時間を抑え、探究の時間を確保していく必要があるのではないだろうか。例えば個々の悩み相談を常に全体交流における話し合いの時間として設定するのではなく、付箋紙による交流掲示板やノートの交流など、常時的な関わりの方をつくっていくという方法も考えられる。いろいろ試してみたい。

価値の創造につながる振り返りの視点について

これまでの道徳教育とは異なり、創造活動においては「この時間でこの価値を獲得させる」ということではなく、「自分にとって意味のある価値を生み出す方法を得る」ことが重要である。和中提案では、価値の実感子どもにとっては自分自身の成長と同義であると捉え、自分がよりよく成長していくための振り返りの視点を子ども自身がもっておくことが必要であると述べられている。何か一つでも学ぶという意識をもてたかどうかを振り返る視点があることによって、追究活動が停滞しそうになっても再度仕切り直しができるのではないかと、ということである。さらに和中提案では、「今日したこと」の記録も重要であると述べられている。これは、達成したことのプロセスを記録することで、少々困難な状況に陥ってもそれを解決し、先に進めるだけの能力が自分に備わっているという感覚を持てるようになる、という考えに基いている。これはすなわち、これまで創造活動で大切にしてきた内容と価値の両方を大切にしていくということであろう。子どもにとって真に意味のある価値は、豊かな体験(内容)に触れることによって生まれ、そこからまた体験を繰り返していくことによって、価値はより実感を伴ったものとなって子どもの中に位置付けていく。この一体化が可能であることこそが創造活動という領域の強みであり、今後大切にしていきたい視点である。

成果と課題

- よりよい授業づくりの根底には、子どものどのような資質・能力を伸ばしたいか、どのような学級集団にしたいかという、教師の教育観や指導観が位置付けている必要があることが、改めて確認できた。また、個々のエピソードを丁寧に拾い集め、それを教師がもっておくだけでなく、時には子どもと共有しておくことが、個々の課題追究の一助となること、これが明らかになった。
- △ 25分という限られた時間の中で、常に全体交流に時間を置くことは難しい。個々の探究の時間を保障するために、掲示物やポर्टフォリオなど、日常的に情報を交換できる手立てを考えたい。

4年 学級創造活動

活動名「一人一人が輝こう」

支援者 和中 雅子 先生

25分の活動時間を上手に運用しながら、テンポ良く活動が進んでいきました。友達の悩みを真摯に受け止め、和やかな雰囲気の中でアイデアを出し合う4年生の姿から、領域の土台となる支持的風土の大切さを改めて感じさせて頂きました。

【子どもの活動】

1 個人追究をそれぞれ進める。



資料や機器を用いて調べ学習をする姿



ものづくりに没頭する姿

2 全体交流の場で個人の悩みについてアドバイスをを行う。



追究の過程での悩みを全体に投げかける



友達の悩みについてアドバイスをを行う

3 本時の活動を振り返る。



本時の問題解決で生まれた価値を共有する



共感的な全体交流

(文責 橘 慎二郎)

【和中先生コメント】

「授業づくり」に一番悩みました。もっと個に解き放った授業をしたかったのですが、少しありきたりな感じになってしまいました。個人的にはいろいろあると思いますが、価値を生み出す際、全体的にどの価値に焦点化すべきか迷いました。価値の中で落としてしまっているものがないか心配です。偏りが出てくる気がします。